

児童養護施設における被虐待児への心理的援助に関する事例研究  
- 日常生活における発達促進要因の分析 -

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター

近年、児童虐待が急増し、児童養護施設に入所してくる虐待を受けた子どもの数は増加の一途をたどっている。虐待を受けた子どもは、問題行動や精神症状、精神発達上の問題を発現する可能性が高く、児童養護施設入所後は、施設の日常生活において様々な問題行動を呈する傾向が見られている。しかし、虐待を受けた子どもに対して、児童養護施設入所後にどのような援助を提供するかという問題への取り組みは、今まで取り上げて検討されることが少なかった。

最近の動向では、虐待を受けた子どもへの心理的援助について、子どもたちがほとんどの時間を過ごす施設での日常生活に目を向ける必要性が提唱されており、施設における日常生活の様々な側面に含まれている治療的な要素について検討することが求められている。

そこで、本論文では、児童養護施設における被虐待児への心理的援助を考えるにあたって、施設のなかの日常生活が備えている、被虐待児の成長や発達を促進するような要因及び治療的に活用し得る要因を明らかにし、被虐待児にとって、施設における日常生活が発達促進的な要因を有していることを示すことを目的とした。

さらに、日常生活における発達促進要因に依拠した指導アプローチとは、児童養護施設における指導、とりわけ子どもの心理的援助にあたって、どのような位置づけと構造を有しているのかを明らかにし、また、子どもの発達段階に応じた援助についても論及を進めていくこととした。

研究方法としては、施設入所児童のエピソード分析を通しての事例研究という手法を用いた。分析のデータであるエピソードは、施設において子どもの生活レベルでの援助を専門とする直接処遇職員が、毎日の業務の終りに記載する子どもの指導記録であり、本研究は日誌分析であるとも言える。

事例研究の対象となったのは、虐待を理由に児童養護施設 X 園に入所している、A 子（小学 4 年女児）、B 子（小学 6 年女児）、C 男（6 歳男児）の 3 名の児童である。

3 事例の個別事例分析及び比較分析から、X 園における日常生活の子どもの発達を促進するような要因及び治療的に活用し得るような要因として、「安定した環境における一貫性のある生活体験」「身体ケアを通しての安心感・安全感の再形成」「子どもと職員との愛着関係の形成」「自己効力感を育む施設内の活動」「生活体験の提供」といった、5 つの発達促進要因が存在することが明らかとなった。

さらに、日常生活における 5 つの発達促進要因に依拠した指導アプローチの位置づけと構造に関して、富永が提案している育成的アプローチに相当するものであると考えられた。そこから、被虐待児への心理的援助とは、セラピーといった限られた場面や時間の中でしか行なえないものではなく、施設における日常生活において連続的に取り組めるものであることが言えた。

また、日常生活における 5 つの発達促進要因の相対的関連性について、子どもの発達段階に照らし合わせながら検討を加えた結果、5 つの発達促進要因は階層性を持っていることが明らかになり、安心感・安全感、信頼感といった絆の育成を土台として、自己効力感の膨らみといった個の成長が縦に促進されていくことが示された。

子どもの発達段階に応じて必要とされる援助としては、3 事例の共通点として、幼児期後半という発達段階においては、子どもが安心感・安全感、大人への信頼感を形成することが重要であることが示された。そして、子どもの安心感や安全感、信頼感の再形成を促進するために必要な援助とは、大人の側が安定した環境における一貫した生活体験を子どもに保障し、身体接触や身体ケアなどを通して子どもの具体的な欲求や要求を的確に受容することを通して、子どもとの愛着関係を形成していくことであるということが明らかとなった。

他に、2 事例の共通点として、学童期前期においては、子どもが二者関係から三者関係への広がりの中で傷付いた自我を立て直せる場の存在として大人が安全基地の役割を果たすことが必要であること、そして、学童期中期においては、子どもの自己効力感を育み、健康で肯定的な自己の発達を促進するために、再成長的・再育成的な環境を施設の日常生活において設定していくことが必要であることが明らかとなった。

本研究で主として行なった事例の比較分析の結果から、3 事例を通して、幼児期後半という時期を子どもがいかに上手く乗り越えて行くことが出来るかが、その後の子どもの行動との関係性から見ても大切であり、児童養護施設での対人援助においては、子どもの発達段階に沿った臨床的な心理的援助を行なうことが必要であることが言えた。

本論文の到達点として、子どもたちが施設入所後にどのような発達の变化を遂げてきたのかといったような、筆者自身と関わる以前の子どもの発達の歩みについて事例を通して分析することで、施設という日常生活に含まれている発達促進的、治療的要素が明らかになったとともに、発達段階の上で子どもたちに必要だったことは何かといったような、子どもたちの成長や発達を支える対人援助のあり方についても言及することが出来た。